

入選

ありがとうの花を

栃木県 栃木西中学校 1年 新村 成奈子

「今日はカレーだぞ。」

母の実家に遊びに行くときは、祖父手作りの食事を楽しみにしている。祖父は世話好きで、じっとしているのが苦手だ。以前、購入した冷蔵庫が届いたとき、配達の人だけでは重いだろうと手伝おうとした祖父に、

「かえって足手まといになるから。」と、祖母が注意するくらいだ。

「人に喜んでもらうのが好きだからね。」と、あきれながら祖母は笑っている。

そんな祖父が、ある日体調を崩した。幸い入院せずにすんだが、日に日に足腰が弱くなって、自分のことをするのも精一杯になってしまい、外出時は補助が必要になった。母は毎日のように実家へ行くようになった。私は祖父が気になり、ときどき遊びに行くようにした。すると、

「成奈子ちゃん、いつもお母さんをとってごめんね。」

と、すっかりやせてしまった祖父が謝った。

「そんなこと気にしなくていいよ。今までじいじはいっぱいお世話してくれたんだから。」
と言いたかったが、泣きそうになって、

「全然平気。それより元気になってね。」

と、精一杯の笑顔で答えた。それから学校の話をとくさんすると、祖父はにっこりしながら私の話を聞いてくれた。帰るときには、「来てくれてありがとう。」と言ってくれた。

早く元気になってほしいと思っていたが、3月に転倒してしまい、入院することになった。病院でもあいかわらず、看護師さんに何かしてもらおうと必ず「ありがとう」の言葉を言っている。痛くて辛いはずなのに感謝の気持ちを忘れない祖父は、すごいと思った。

4月に祖父は87年間の人生を卒業した。お疲れ様。私をかわいがってくれてありがとうと心を込めてお礼を言った。祖父といっしょに働いていた人たちや絵画教室のメンバー、昔サッカーを教えていた子どもたちもお別れにきてくれた。会場には大勢の人たちが、入りきれないくらい集まってきた。これが人の喜ぶことが大好きだった祖父がまいた思いやりの種だと思うと、涙があふれてきた。

そして不思議なことが起こった。お葬式が終わっても一人も帰らないのだ。みんな手に手に花を持って、ひつぎに花をそなえながら、祖父に「ありがとう」と話しかけ始めたのだ。

「じいじ、じいじがまいた種の花が咲いたんだね。これがありがとうの花なんだね。」

と思ったら、涙が止まらなくなった。私はみんなへの感謝の気持ちでいっぱいになった。会場いっぱい「ありがとう」があふれ、ありがとうの花でいっぱいになった気がした。

「よかったね、じいじ。ばあばのことは心配しないで大丈夫だよ。これからは私が、ばあばを守るからね。」